

論文

情報の取得による高齢者イメージの変化について

How People Change their Beliefs Based on Information Received

吉永敦征, 畔津忠博, 金恵媛¹

¹ 山口県立大学国際文化学部

Nobuyuki YOSHINAGA, Tadahiro AZETSU, Hyeweon KIM
Faculty of Intercultural Studies, Yamaguchi Prefectural University

本研究は情報を取得することによるイメージや態度の変化について、その変化の枠組みを構築することを目的とする。その枠組とは、第一に取得した情報によっては高齢者への好悪感情が変化しないこと、第二に取得した情報の整合性を持たせるように（整合的な解釈が行なえるように）個人的な意識や規範的意識が変わるといふ2点のことである。本研究では「高齢者を取り巻く劣悪な環境」および「高齢者の認知機能的説明」という二つの情報を与えた結果、主観・客観ともに「高齢者へのコミットメント」「高齢者への援助」に対する意識が強まった一方で「高齢者への態度」に対する主観的な意識が下がったことを確認できた。この事実を説明するために、情報によって感情や信念のすべてが変化するのではなく、むしろ情報を整合的に解釈するための基礎として好悪感情を用いているとみなす方が合理的であることを示す。つまり好悪感情を変化させない形で、取得した情報を解釈できるように信念を変化させていることを示した。

The purpose of this study is to develop a framework to explain how people change their beliefs about elderly people, or change their behavior to them, based on information received. The proposed framework shows that positive or negative feelings towards elderly people do not change based on the first receipt of new information and that people try to change their beliefs to preserve consistency in their feelings. In this study, two pieces of information were supplied to research subjects. One related to the "worsening of the environment surrounding elderly people" and the other related to "an explanation of cognitive functions in elderly people". Some interesting changes were observed in the beliefs of the research subjects. This study shows that information itself does not provoke changes in partiality or the revision of beliefs. It is rational to consider partiality as a basis for the revision of beliefs based on information. That is, people change their beliefs in order that their partiality remains unaffected.

キーワード：信念改訂, 高齢者イメージ, 情報取得, 好悪感情

Keywords：Revision of beliefs, Impressions of elderly people, Information received, Partiality

1. 研究目的

本研究の目的は、私たちの信念の形成に対して情報が持つ役割を明らかにし、情報を取得することで変化が起こる信念についてモデル化を行うことである。

インターネットには偏見や差別的な言説が大量に流通しており、これら言説によって私たちの考え方が歪み、偏見を抱くようになるという見方がよくなされる。それゆえに虚偽情報やデマに代表される、

信頼性の低い情報にはアクセスしないことが正しい態度であるとされる。このことには、私たちの信念形成に対して情報が影響力を持つ（情報によって私たちの考え方が変化する）という前提が存在している。この前提について検証することが本研究の目的である。もし情報が影響力を持つとするなら、それはいかんにして、どの程度、何を原因として、何に影響をもたらすのか、そしてもし影響力を持たないと

するならばそれはまたなぜかを明らかにするために、情報の取得前後で起こる変化を観察することにした。

具体的には高齢者に対して抱いているイメージや偏見、ステレオタイプ等が、高齢者に対する情報を取得することによって起こる考え方の変化を記録し、そこで起こった影響を分類し、情報内容と信念の関係をモデル化する基礎データとする。情報を取得することで感情的側面、認知的側面のそれぞれに影響があるという指摘が存在する。本研究では感情的側面と認知的側面が持つ関係について考慮するため、「高齢者に対する好悪感情」、「高齢化すること」、「高齢者への援助」、「高齢者に対する態度」、「高齢者に対するコミットメント」について取得した情報による考え方の変化を計測した。

2. 研究方法

本学の学生8名を対象とし、情報の取得によって変化する高齢者イメージを計測した。情報を取得する以前と情報を取得した後の高齢者イメージの変化は、事前アンケートと事後アンケート^{*1}の比較から測定し、その内容の変化を記録した。高齢者の情報は、使用文献一覧に挙げている文献を題材とした。学生にそれら文献の中から1-2冊を選択させ、まとめをレポートとして作成させた。レポートの作成だけではなくすべてのイメージの抽出が不十分だと予測できるため、最後にディスカッションを企画した。ディスカッションの前にそれぞれのレポートを相互に読み上げることですべての学生と内容を共有させ、情報を均等にした。ディスカッションを通じて、各学生がまとめ忘れた老人についてのイメージや、他の学生の発表から気づいた内容を拾い上げることで、それぞれが取得した情報内容を網羅的に把握できるようにした。

文献のまとめは書籍の内容を全体的にまとめたものは求めず「書籍の特徴的な部分」「まとめた部分についてのコメント」「発見したこと」の3点を記述させた。事前・事後アンケートおよび協力者にはシリアル番号を付与し、信念の変化を追跡できるようにしているが、シリアル番号と協力者とは結びつけずに匿名性を確保した上でデータを取得している。

文献のまとめやディスカッションの内容も記載したが、重複する内容もあるため老人イメージに関わる特徴的なもののみを掲載している。

2.1 高齢者イメージ収集のスケジュール

本研究は2016年10月に実施した。大まかなスケジュールは下記の通りである。

- ・山口県立大学生命倫理委員会より承認を得ていること（承認番号27-50号）ならびに研究内容を説明したのち、協力者には研究同意書への記入および提出を依頼した
 - ・8名の協力者へ事前アンケートを行なった
 - ・情報を取得する以前の高齢者イメージの記録を依頼した
 - ・アンケート実施後に1冊目の書籍を1-2冊選ばせた。このときに選択した書籍は全員が異なったものとなっている
 - ・2冊目の書籍は1週間後に協力者へ渡した。2回目は全員に同じ書籍を配布している
 - ・事前アンケートから2週間後に事後アンケートを行なった
 - ・アンケート終了後に、書籍についてまとめた内容の発表とディスカッションを行なった
- これら協力者の作業が終了した後、協力者の作成したレポートおよびディスカッション時に提出された高齢者イメージをまとめ、分析に用いている。

2.2 アンケートで計測した内容

アンケートは、高齢化への印象、高齢者への態度等について調査を行なった。高齢化への印象は5つの項目で計測し、高齢者への態度等は12の項目で計測している。

2.2.1 高齢化への印象の調査

高齢化への印象は下記の項目について5段階で評価させた。

1. あなたは老人を見かけたときにどのような印象をもちますか
2. あなたは、あなたの家族や周囲の人が年をとってゆくことについてどのように思いますか
3. あなたは自分自身が年をとってゆくことについてどのように思いますか
4. あなたが老人になるとあなたはどのように感じると思いますか
5. これからの社会では老人はどのようになってゆくとおもいますか

1. 内容は事前アンケートと同一にしている。

1, 2, 3については「とても好ましい」「どちらか」というと好ましい」「何も思わない」「どちらか」というと嫌だ」「とても嫌だ」の5つを選択肢として提示し、4, 5については「幸せになる」「どちらか」というと幸せになる」「変わらない」「どちらか」というと不幸になる」「不幸になる」の5つから回答させた*2。これら高齢化への印象について、「主観的」、「客観的」、「好ましい」「幸せ」という分類で点数化した*3。

表1 高齢化への印象

	主観的	客観的
高齢化への印象	好ましい/嫌だ	好ましい/嫌だ
	幸福/不幸	幸福/不幸

2.2.2 高齢者への態度等の調査

高齢者への態度等については下記の項目で尋ね、「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「どちらとも言えない」「あまりそうではない」「まったくそうではない」の5段階で評価させた*4。

1. 通常、私は老人を世話する/世話すると思う
2. 通常、私は老人に財政的な助けをする/すると思う
3. 通常、私は老人を尊敬する
4. 通常、私は老人の言葉を注意深く聞く
5. 通常、私は老人を喜ばせる
6. 通常、私は老人と持続的に接触する/会う
7. 通常、若い人たちは老人を世話しなければならない
8. 通常、若い人たちは老人を財政的に助けなければならない
9. 通常、若い人たちは老人を尊敬しなければならない
10. 通常、若い人たちは老人の言葉を注意深く聞かなければならない
11. 通常、若い人たちは老人を喜ばせるべきだ
12. 通常、若い人たちは老人と持続的に接触/会わなければならない

これらの項目について、「1と2」「7と8」を高齢者への援助、「3と4」「9と10」を高齢者への態度、「5と6」「11と12」に高齢者へのコミットメントを表すものと解釈し下表のようにまとめた。a~fまでの項目は1~5の数値で点数化し、情報の取得前後によってそれぞれの数値の変化を測定した。

表2 高齢者への態度等

	個人の意識	規範意識
高齢者への援助	a	b
高齢者への態度	c	d
高齢者へのコミットメント	e	f

2.3 取得した情報

内容については類似する記述を分類し下表3にまとめている。表3は学生が任意に選んだ書籍の特徴的な部分を抽出したものおよびそれらへの学生のコメントを含んでいる。

表3 一冊目の書籍から得た情報(付録Bを参照のこと)

老人の孤立	孤独死
	関係的貧困
	金銭的貧困
	幸福度の低下
視線の変化	尊敬の対象
	お荷物
高齢者と若者の対立	貯蓄が多く消費しない高齢者
	高齢者向けの政策が多い
	介護労働環境の悪化
	再配分が機能していない
高齢者への福祉	老老介護
	介護殺人
	老人ホーム不足
	劣悪なホーム環境
その他	生活保護の受給拒否
	高齢者の増加スピードが早い都市部
	比較的裕福な地方の高齢者 少子高齢化の進行

表4の内容は、すべての学生が共通して読んだ書籍からの特徴的な部分のまとめになっている。

表4 二冊目の書籍から得た情報(付録Bを参照のこと)

高齢者の精神について	老人は実年齢よりも自分のことを若いと思っていて「まだできる」という気持ちで行動をする
	基本ポジティブである。残された人生を生きる上で重要な為、ネガティブな感情は忘れやすい
	年が増えれば増るほど主観年齢と暦年齢の差が大きくなる
	わがままな人が長寿なのは自律による幸福感が高く保たれ、そのことが心身により影響を与えるから

2. 両者とも低い数値が「好ましい/幸せ」を、高い数値が「好ましくない/不幸」を表している。
 3. 1を高齢者に対する好悪感情、2を高齢者になることの客観的な印象、3を高齢者になること的主観的な印象、4を高齢者になることの主観的な幸福感、5を高齢者になることの客観的な幸福感とした。
 4. これら項目はGallos et al (1999) による「Filia Pieti Scale」を応用したチョン・ミエの尺度(韓国老年学フォーラム編, PP. 323-330)を活用した。低い数値が「そう思う」を、高い数値が「そう思わない」を表している。

高齢者の精神について	悪口がきこえるのは人は自分の情報にアクセスがはやいためである
高齢者の行動について	自分の老いに適した生活をし行動するようになる
	老いに適応することで発達していく
	美容やアンチエイジングをする老人が増え、外見、気持ちに若さがある
脳機能の衰え	「情報処理能力」のスピードが遅くなるためにとる行動が多い
	都合のよいことしか覚えていないことや高いプライドをもっている
そ の 他	老いてからは、外に出て人と会話したり、自然に触れたり、新しいものに出会ったりして、心を動かし、考え、知的体験をすることはとても重要である
	ご老人が老いていくということがわかっている。老いの過程の中で、孤独や無力感が現代の社会がさらに深刻にさせているということもある
	老人でない私たちでも老人になるとどのようなことが起きるのが分かる。これから老人と関わることがあれば理解し、敬っていくことが大事である
	老人にとっては、衰えをカバーするために、人に頼る自然な行動だとしても、若者からは自己中心的だと思われたり、想像するよりも若い行動をとるのでギャップが生じる

これらの情報の取得の結果として起こった数値の変化を次節で示すように解釈し分析を行なった。

3. 分析

本節では取得した情報、情報取得前後での数値の変化および、それらから推測されるだろう信念の変化について、どのような情報を得た結果どのように信念が変わったと考えられるのかについて結果を分類する。次に情報と信念の変化を説明するための理由を考察する。

まず、高齢化への印象（高齢者への好悪感情）が情報の取得前後で変化するかを表5および表6にまとめた*5。

高齢化への印象では次のように分析を行なってい

る。事前および事後のアンケートの結果「主観的幸福」について数値が下がった場合には「高齢者になると幸福が増える」という解釈を行ない、「客観的好ましさ」の数値が上がった場合には「高齢化を嫌だと感じるようになった」という解釈を行なっている*6。

また高齢者への態度等も同様に分析を行なっている。事前アンケートでaの得点が1だった場合、高齢者への援助を個人では行うという考え方をしているとみなす。これが情報の取得後に5点になった場合には、高齢者への援助を個人では行なわないというように考え方が変わったと考えられる。また、規範意識として高齢者への援助が事前では5点だったものが事後には1点になっていたとすると、高齢者への援助は社会で行うべきだという考え方が強まったことを意味すると考えられる。もしこれらの両方の事態が発生したなら、高齢者への援助は個人ではなく社会で行うべきだという考え方に変化したと考えることができる。

このときの情報が特定されることで、ある情報の取得が高齢者への援助についての考え方を社会的援助または私的援助のどちらかに変えたとみなすことができる。これが数値の変化によって得られる一つのパターンとなる。

3.1 想定されるパターン

事前のaから事後のaへの変化には3パターン存在する*7ので、すべての項目を考慮した組み合わせとしては729パターンが存在することになる。それぞれのパターンについて、その変化を説明する理由が存在する必要がある。前節で述べた例を用いれば、「aの変化とbの変化」が「福祉政策寄り」を意味すると理由づけられ、取得した情報による変化だとみなすことができる*8。同時に「高齢者へのコミットメント」の数値が上がれば、高齢者を周辺化してゆく意識が強まったことを意味するだろうし、数値が下がれば地域の中で高齢者へのコミットメントを強めようという変化として解釈ができる。

3.2 アンケートの分析結果

5. それぞれの値については検定を行ったが統計的な有意差は無かった。そのため今回の調査において取得できたデータについては、ありうる可能性の一つとして取扱い、その場合の解釈に留めるものとする。

6. 数値の上下については脚注2を参照のこと。

7. 数値が上がる、変化しない、数値が下がるの3つのパターンとなる。

8. 同時にc~fの変化も考えなければならない。このとき、他の項目と相関があると想定するならばパターンはカテゴリー化され少なくなり、モデル化がより行いやすくなることは明らかであるが、本研究ではサンプルが8しかなく、想定されるパターンから数の隔たりが大きいため、項目間の相関については分析を行っていない。同様に、入力となる情報についても多くを集めることでカテゴリー化は可能であり、信念が改訂されるさいに想定されるパターンはより少なくなると考えられる。

3.2.1 高齢化への印象の変化

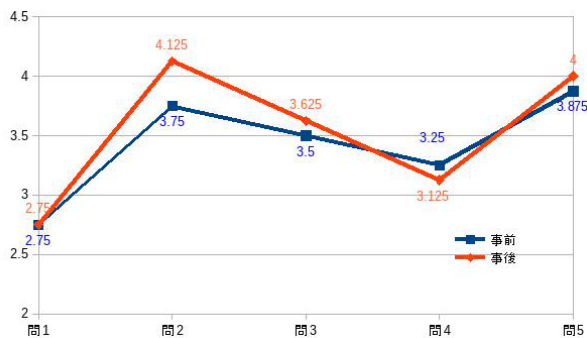
- ・高齢者への好悪感情は変化していない (2.75→2.75)
- ・高齢者への主観的な印象はほぼ変化していない (I)
- ・高齢者への客観的な印象の変化が起こっている (嫌いな方向へ変化している) (II)
- ・高齢者になることへの主観的な幸福感についてはほぼ変化していない (III)
- ・高齢者になることへの客観的な幸福感については変化が起こっている (不幸になる方向へ変化している) (IV)

表5 事前アンケート

	主観的	客観的
高齢者への印象	(I) 3.50 (1.07)	(II) 3.75 (0.89)
	(III) 3.25 (0.89)	(IV) 3.87 (0.83)

表6 事後アンケート

	主観的	客観的
高齢者への印象	(I) 3.62 (0.69)	(II) 4.12 (0.38)
	(III) 3.12 (0.82)	(IV) 4.00 (0.90)



グラフから明らかなように問4 (あなたが老人になるとあなたはどのように感じますか) の項目が逆転しており、数値の変化は少ないが幸福になる方向へと変化している。これは全体的に否定的な方向へ推移していることと逆の動きとなっている。

3.2.2 高齢者への態度等の変化

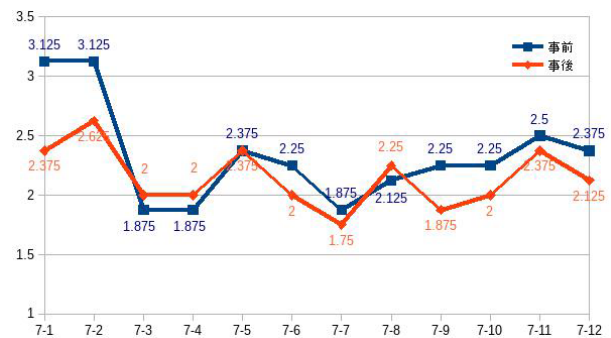
事前事後の比較から、ほとんどの項目で数値が下がっていることから、老人への態度等は積極的な方向へ推移していることがわかる。

表7 事前アンケート

	個人の意識	規範意識
高齢者への援助	3.12	2
高齢者への態度	1.87	2.25
コミットメント	2.31	2.43

表8 事後アンケート

	個人の意識	規範意識
高齢者への援助	2.5	2
高齢者への態度	2	1.97
コミットメント	2.18	2.25



全体的にポジティブな方向へと変化しているが、グラフからは問7-3と問7-4および問7-8が逆転していることが読み取れる。問7-3「通常、私は老人を尊敬する」と問7-4「通常、私は老人の言葉を注意深く聞く」、問7-8「通常、若い人たちは老人を財政的に助けなければならない」はネガティブな方向へと変化している。

3.3 項目間の相関

高齢化への印象の変化について計測した数値の項目間の相関を計算した*9。

1. 「問1と問2」と「問1と問3」が、事前アンケートでは正の相関であったが、事後アンケートでは負の相関へと変化している。
2. 「問2と問4」および「問2と問5」について事前アンケートでは相関が無かったが、事後では共に同程度の相関が見られる。
3. 「問3と問4」では相関が無くなっている。
4. 「問1と問4」では相関が低くなっている。

4. 考察

4.1 高齢化への印象について

情報の取得により「高齢者への好悪感情」に変化

9. 相関係数のデータは付録に掲載している。

が見られないことが大きい。つまり今回取得した情報では高齢者に対してもともと抱いていた感情に変化がないことを意味する。また、客観的には高齢者になることは嫌なことであり不幸になることというように考え方が変化している一方で、主観的には高齢者になることは好ましくないが幸福であるというような信念が形成されている。

これは(a)「私が高齢者になることは好ましくないが幸福にはなる」と考えつつ(b)「他の人々が高齢者になることは好ましくもないし幸福でもない」と考えていることを示している。

(a)については主観的な幸福度の向上が二冊目の書籍より得られたからだと考えられる。同時に一冊目の書籍からは、現在の社会状況においては高齢化することによるデメリットが多いことを読み取り「好ましくはないが幸福」という考え方につながったと推測できる。相関係数を見てみると事前アンケートの時点では、高齢化することの「好ましい/嫌だ」と「幸福/不幸」という項目の数値は0.45程度であったが、事後アンケートでは無相関となっている。これは「好ましい/嫌だ」と「幸福/不幸」という概念を連動して考え無くなったことを意味する。

(b)については、次のように解釈ができる。高齢化することについての客観的な「好ましい/嫌だ」と客観的な「幸福/不幸」は、事前アンケートの時点では相関が無かったが事後アンケートでは中程度の相関となっている。このことから第三者については「好ましい/嫌だ」「幸福/不幸」が概念的に結びついたことを意味する^{*10}。高齢化することについては主観的・客観的な「好ましい/嫌だ」の相関は強いままである。

これらから、自分に関しては主観的な幸福度で高齢化を評価し、第三者については客観的な幸福度で高齢化を評価するということが読み取れる^{*11}。

高齢化することについて嫌悪感があるが、それは取得した情報のほとんどが未来を悲観するものである（高齢者を取り巻く環境の悪さである）からだと思われ推測できる。また高齢化するという機能的な説明や主観的幸福度などの情報を同時に取得していること

で、高齢化自体が不幸であるという考えには変化しなかったことも推測できる^{*12}。

高齢化への印象については、情報が増えることで概念同士の関係を分析し、また総合するなどの操作が行なわれることに寄与しているが、好悪感情には影響が無いことが示された。

4.2 高齢者への態度等について

高齢者への態度で大きい変化は(c)「高齢者への援助を個人でも行うべきだ」という方向へ考えるようになった点である。高齢者への援助についての規範意識に変化は認められず、全体的に援助意識が高まったことを示す。「高齢者への援助」を構成する2つの項目別にデータを見てみると規範意識は、しかしながら、世話はするべきだが財政的には手助けをするべきではないというように判断が変わっている。

また(d)「高齢者へのコミットメントが、個人の意識としても規範意識としても行うべきだ」という方向に動いている。

これらの動きとは逆に(e)「高齢者への態度は個人の意識としては低下しながらも、規範意識としては行うべきだ」という方向に変化している。

(c)については、政府が財政難であることから高齢者への社会的援助はプライオリティを下げ、その分だけ個人で負担するというように意識が変化したと考えられる。もし情報の取得により好悪感情が変化したとするなら、このような信念の変化は起こりえないだろう^{*13}ことから、今回の情報の取得による好悪感情の変化は無いと判断することができる。

(d)については関係的貧困などの情報によって、高齢者を孤立させるべきではないという判断につながったと考えられる。その一方で(e)については、高齢者の認知機能や行為についての情報を得た結果としてステレオタイプである「高齢者はうやまうべき」という判断を切り離すことができたと思えることができる。その一方で誰かがやらなければならないという意識^{*14}から社会で行うべきだという規範意識が強まったと解釈できる。つまり高齢者を敬うこと

10. この変化の背景には一冊目の影響が大きく読み取れる。多くの書籍で高齢化と環境の悪化と不幸さの結びつきが述べられているためである。

11. 主観的幸福度を元に判断するのであれば、高齢者の視点からすれば高齢者も幸福度は上昇すると予測できるはずだが、そのようには変化しておらず、幸福についての考察を進めるさいにこの変化は示唆的である。

12. そのため、高齢化そのものが不幸であるような情報を取得した場合には、今回の研究結果とは異なった考え方になる可能性が考えられる。これは今後の検討課題である。

13. 高齢者を嫌う感情を持っているのであれば、財政難という事実から個人の支出を増やすという方向には考えないだろう。

14. (d)の変化。

を個人から外部化するような変化が起こっている。

上記の変化は高齢者を取り巻く社会状況が「好ましくなく、不幸」であり改善が必要であるという信念変化から起こっている。これは比較的フラットに高齢者への好悪感情を有している人物にとっては、高齢者が貧困の状態にあることを放っておけないというように考えが変化しているからだとみなせる^{*15}。もし嫌悪感を感じている人々に同様の情報を提供した場合に、どのような変化になるのかは明らかではない。

高齢者への態度についても、取得した情報の整合性をとるように個人の意識や規範意識に変化が見られる。つまり高齢化への印象と同様に、情報量の増加によってそれら情報を統合的に解釈できるような考え方を持つようになることを示している。

4.3 信念改訂を説明するモデル

上記の2つの例から信念を改訂するモデルとして推測できるのは、好悪感情を基礎とした情報の整合性を保つように信念を変化させるという見方である。情報によって感情や信念のすべてが同時に変化するのではなく、むしろ情報を統合的に解釈するための基礎として好悪感情を用いているとみなす方が合理的な理解である。

これは当然のことだと思われるだろう。私たちにはさまざまなバイアスがかかっており、自身の好悪感情をもとにして情報を好意的に受け止めたり、批判的に受け止めたりしているからである。むしろ極めて日常的な心の理解に他ならないという具合に。日常的な心の理解が正しいとするなら、問題は好悪感情が変化するタイミングに絞られることになり、これは今後の課題の一つである。

5. 課題

書籍のみではなく、インターネット上で流通している情報にも触れることで起こる変化を計測し、情報と信念との関係を規定するための、より精緻なモデルを構築することが今後の課題である。本研究では、一定の考え方の変化を観察することができた。だが対象者が少ないこと、対象者の抱いている高齢者のイメージが比較的類似していること、高齢者への好悪感情にも幅がないこと、取り扱った書籍が高

齢者に対する福祉という観点からの記述が多いこと、高齢者への誤った事実などの情報が少なく、情報の種類が偏っているといえる。また高齢者自体を否定的に語る情報（高齢化自体を悪とするような情報）も得ていない。このことから、情報の取得と信念の変化の関係にも偏りが考えられるし、好悪感情の変化についても計測できていない。

6. 結論

本研究は情報を取得することによるイメージや態度の変化について、その変化の枠組みを構築することを目的とした。その枠組とは、第一に取得した情報によっては高齢者への好悪感情が変化しないこと、第二に取得した情報の整合性を持たせるように（統合的な解釈が行なえるように）個人的な意識や規範的意識が変わるという2点のことである。そのため本研究では、高齢者を取り巻く環境の悪化という情報および高齢者の認知機能的という二つの情報を与えることで、主観・客観ともに「高齢者へのコミットメント」「高齢者への援助」に対する意識が強まった一方で「高齢者への態度」に対する主観的な意識が下がったことが明らかになった。この事実を説明するために、情報によって感情や信念のすべてが変化するのではなく、むしろ情報を統合的に解釈するための基礎として好悪感情を用いているとみなす方が合理的であることを示した。つまり好悪感情を変化させない形で、取得した情報を解釈できるように信念を変化させている可能性を示した。

7. 謝辞

本研究はJSPS科研費（15K01882）の助成を受けて実施した調査を元にしたものである。

15. 当然ながら、この根底には他者を目的として取り扱うべきだという考え方が存在しなければならない。

付録A 集計結果

高齢化の印象の数値

	問1	問2	問3	問4	問5
事前	2.75	3.75	3.5	3.25	3.88
事後	2.75	4.13	3.63	3.13	4
t検定p値	1	0.285	0.805	0.776	0.781

高齢者への態度等の数値

	問7-1	問7-2	問7-3	問7-4	問7-5	問7-6	問7-7	問7-8	問7-9	問7-10	問7-11	問7-12
事前	3.13	3.13	1.88	1.88	2.38	2.25	1.88	2.13	2.25	2.25	2.5	2.38
事後	2.38	2.63	2	2	2.38	2	1.75	2.25	1.88	2	2.38	2.13
t検定p値	0.166	0.446	0.781	0.782	1	0.642	0.776	0.776	0.438	0.59	0.77	0.537

事前・事後での高齢化への印象についての相関係数

	事前	p値	事後	p値
問1と問2	0.114	0.788	-0.429	0.289
問1と問3	0.378	0.356	-0.386	0.345
問1と問4	0.57	0.14	0.303	0.466
問1と問5	0.424	0.296	0.218	0.604
問2と問3	0.603	0.114	0.606	0.111
問2と問4	-0.091	0.83	0.424	0.296
問2と問5	-0.048	0.91	0.436	0.28
問3と問4	0.452	0.261	0.07	0.869
問3と問5	0.24	0.567	0.168	0.69
問4と問5	0.628	0.096	0.74	0.036

付録B 使用文献一覧

個別に配布した書籍（一冊目）

- [1] NHK スペシャル取材班『無縁社会日本』, 文春文庫, 2012.
- [2] 秋葉剛『生活保護から考える』, 岩波新書, 2013.
- [3] 朝日新聞経済部『ルポ 老人地獄』, 文春新書, 2015.
- [4] 河合克義『老人に冷たい国日本』, 光文社新書, 2015.
- [5] 島田裕己『もう親を捨てるしかない』, 幻冬舎新書, 2016.
- [6] 鈴木大介『老人喰い』, ちくま新書, 2015.
- [7] 藤田孝典『下流老人』, 朝日新書, 2015.
- [8] 三浦展『下流老人と幸福老人』, 光文社新書, 2016.
- [9] 八代尚宏『シルバー民主主義』, 中公新書, 2016.
- [10] 山田昌弘『少子社会日本』, 岩波新書, 2007.

共通に配布した書籍（二冊目）

- [1] 佐藤信一『ご老人は謎だらけ』, 光文社新書, 2011.

参考文献一覧

- [1] アントニオ・ダマシオ『デカルトの誤り』, ちくま学芸文庫, 2010.
- [2] ジョナサン・ハイト『社会はなぜ右と左にわかれるのか』, 紀伊國屋書店, 2014.
- [3] 高史明『レイシズムを解剖する』, 勁草書房, 2015.
- [4] 堀薫夫、大谷英子「老人イメージに関する調査研究－生涯教育の視点から－」『大阪教育大学生涯教育計画論研究室』, 1995, <http://ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/dspace/handle/123456789/4204>.
- [5] 韓国老年学フォーラム編『老年学尺度集』, ナナムの家, 2010（韓国語）.